

## 31 自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する研究

### -ICF - Based 調査票を用いた調査からの一考察-

研究所 発達障害情報・支援センター 鈴木さとみ, 深津玲子

自立支援局 就労移行支援課 四ノ宮美恵子

#### 目的と背景:

国連の障害者権利条約では、障害者の社会への完全かつ効果的な参加と平等が謳われており、発達障害のある成人にとって、一般労働市場への参加は社会参加の主要な形態のひとつである。

筆者らは、就労を目指す発達障害(Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD)者の生活機能を評価するため、彼らの活動と参加、環境を国際生活機能分類(International Classification of Functioning, Disability and Health, 以下 ICF)に基づき分類する、ASD 者の就労支援のための ICF をベースにした調査票(以下、ICF 調査票)を開発し、その有用性を確認した。

今回、この ICF 調査票を用いて就労支援サービスを利用する ASD 者と定型発達の成人との比較および ASD 者と支援者の認識の差について検討を行った。

#### 方法:

(1)就労支援サービスを利用する ASD 者 21 名(平均年齢 24.81±4.19)、高等学校普通教育課程を終了した 18 歳以上の ASD の診断のない者 20 名(平均年齢 21.95±3.15)を対象として ICF 調査票を実施し、ASD 群と統制群で差の検定を行った。

(2)上記 ASD 群のうち支援者による評価が得られた 6 名について、自己評価と他者評価の差の検定を行った。

#### 結果:

(1)ICF 総得点において、ASD 群の自己評価は統制群の自己評価と比較して有意に低かった( $p < 0.01$ )。ICF 第一分類では、ASD 群は統制群よりも「学習と知識の応用」( $p < 0.01$ )、「一般的な課題と要求」( $p < 0.01$ )、「コミュニケーション」( $p < 0.01$ )、「家庭生活」( $p < 0.01$ )、「対人関係」( $p < 0.01$ )、「主要な生活領域」( $p < 0.01$ )において有意に低かった。ICF 第 2 及び詳細分類では「コミュニケーション」「家庭生活」「対人関係」のほとんど全ての項目で有意に低かった。

(2) ASD 群の自己評価と支援者による他者評価は、ICF 総得点において有意差はなかった。

#### 考察:

結果(1)は、ASD 群は統制群よりも社会生活上の活動や参加に制限があると感じていることを示していた。今回、ASD 群全員の支援者に他者評価として ICF 調査票を依頼したが回答項目に欠損値が多く、欠損値のない 6 名についてのみ検定を行った。支援者評価に欠損値が多かったことは、支援機関の機能が異なるため、支援者が利用者の状態・状況について把握する内容が異なることが一因すると考えられる。一方で、ASD 者が安定した職業生活を送るには日常生活が安定して営めていることがキーポイントの 1 つとなるため、支援者が介入初期から社会生活上の課題を構造化した方法で把握することは、特性や個人の支援ニーズにより即したサービスを提供するのに必要であると考えられた。